

## 世界の人びとのための J I C A 基金活用事業・業務完了報告書

1. 業務の概要：	
(1) 事業名	フィリピン僻地農村出身の若者を対象とした、リーダー育成のための教育と生活向上を視野に入れた就職・起業支援
(2) 実施団体名	EDAYA
(3) 実施期間	2017年5月17日～2018年1月31日
(4) 実施国	フィリピン
(5) 活動地域	ルソン島北部コーディリエラ地方
(6) 活動概要	<p>①活動の背景：</p> <p>EDAYA では、マイノリティーのエンパワーメントをミッションとして、フィリピン・ルソン島北部僻地農村出身の少数民族の若者を対象に、地域の持続的な発展に貢献するリーダーの育成を行っている。伝統と現代のバランスをとりつつ、農村経済の活性化と生活向上を主体的に担うことのできる人材育成が、途上国農村の持続可能な発展には必要不可欠であるとの考えから、2015年より本格的に取り組み始めた活動だ。この地域では、大学卒業後も鉱山労働者や出稼ぎ労働者となる若者が非常に多く、学びを生かす機会を見つけることのできないまま、頭脳流出や労働力流出が起こり、農村が疲弊している。この現状の改善は急務であると私たちは考えている。</p> <p>そこで、2015年10月～2016年3月の期間では3名を育成し、無職から研修を経て、地域の高校教諭、消防士、生涯学習の教師となる人材を育成することができた。本事業では、続く2期生への研修・教育を行った形である。2017年7月～12月の期間で5名を支援した。</p> <p>②活動の目標：</p> <p>ハンズオンでの研修を半年間実施し、5名の農村発展に貢献する研修生を育成することと、そして、研修で得られたスキルを実際に生活向上につなげて行けるところまで、半年の期間中に就職・起業支援まで行うことを目標とした。</p>

## 2. 業務実施結果：

### (1) 実施した内容

#### 【実施内容①】

7月～12月の通常の研修期間に計12名の専門家による講義を実施した。7月～10月中旬までは、1週間～2週間ごとに、社会的起業、デザインシンキング、ソーシャルファイナンス、IT、プロジェクトマネジメント、ピッチなどといったテーマを定め、聴講型の講義とハンズオンでのワークショップ型の講義を混ぜ合わせながら、これからのリーダーに必要なと思うテーマを5名の研修生に共有していった。5名の研修生は、フィリピン・コーディリエラ地方の僻地農村の出身者であり、それぞれが違う州（アパヤオ州、カリンガ州、ベンゲット州、マウンテンプロビンス州、アブラ州）の出身である。途中1ヶ月間のコミュニティーリサーチの期間を除いて、彼らは衣食住も共にし、同期研修生同士の絆も育てていった。このことは、積極的な参加を求められる講義の場においても、それぞれが恥ずかしがることなく、議論を進めていける環境を構築するのにも貢献した。8月最終週～9月頭には、実際にマニラにある社会的起業を訪問した。彼らにとっては比較的新しい内容であった上記内容を、頭だけでなく、体験を通して理解する、大変良い機会となった。10月中旬～12月初旬は、彼ら自身が起業の模擬体験をする期間で、それぞれが自分のプロジェクトを立ち上げ、村でのリサーチ、プロトタイプ制作、ビジネスモデル構築、ウェブサイト制作、ピッチなど、起業に必要な一連のプロセスを実際に経験した。

#### 【実施内容②】

12月4日～10日の期間、Youth Hack Community Camp というハッカソンを行った。半年間の研修を経てそれぞれのプロジェクトを持つに至った研修生たちが、初めて外部の人々にアイデアをシェアし、仲間を募り、さらにプロジェクトを具体化していくという内容であった。

## (2) 実施成果：

半年間のプログラムに参加した5名の研修生の全員にとって、私たちが教えた内容は、ほぼ全て初めて耳にするものであり、最初の1ヶ月間は相当に苦勞しながら、講義についてきていた。講義のスタイルもこれまで大学で経験してきたものとは180度違う、ハンズオン型であった。手を動かし、頭を動かし、意見を言わざるを終えない環境は、大きな刺激となったようである。研修終了後は、社会的起業やデザインシンキングを自分の言葉でも説明できるまでの成長が見られた。

基礎のレクチャーの中間で行った、マニラの社会的企業訪問は、非常に学びが大きかったようだ。それまでの1-2カ月の学びが、実体験として理解でき、ようやく概念として机上で学んできたものががすとんと頭に入ってきたとのことであった。10月中旬以降、それぞれのプロジェクトの村での実施可能性の調査のために、一度自分の家族のもとへ戻ったことも、研修生にとってはひとつのハイライトであったようだ。EDAYAでの研修の内容の詳細を知らない家族に対して、その内容を自らの言葉で、家族にもわかるように説明し理解を得ることは、どちらかという親兄弟の期待に沿うことをよし、とする文化の中で生きてきた彼らにとっては、ハードルが高いことのようにであった。ただその期間を乗り越えて、自分の手で自分がやりたいことをやろうとしているという実感を得て帰ってきた研修生が全員だったことは、大きな成果であった。12月のハッカソンでは、全員がプロトタイプを実施するところまで至り、本事業で目標としていた起業支援の入口には到達することができた。ハッカソンの審査には、海外からのゲストの他、地元の有識者も加わり、大いに盛り上がった。ハッカソン終了後も、それぞれがマイルストーンを設定し、少しずつでも事業をカタチにしようと取り組んでいる。

### (3) 得られた教訓など：

最初はプログラムがあたえてくれるものに半信半疑であった研修生たちが、最後には EDAYA の教育プログラムの 2 期生になることができたことを誇りに思い、プログラム終了後も何かと顔を出してくれている。自分たちが信じたことを、真摯に伝えていけば、相手にもその分だけきちんと伝わるのだという当たり前のことを、実感させられた。すぐに新たな研修生たちのプログラムが始まるが、2 期生たちのこれからの生き様が、そのまま私たちの教育の成果と言えるわけで、今後もきちんとフォローアップしていきたいと考えている。

### (4) 今後の活動・フォローアップの方針：

1 月から 3 期生のプログラムをはじめようと考えていたが、2 期生からの提案で半年のプログラムより短い 3 ヶ月のプログラムで実施することを考えている。少し拘束期間が長かったというフィードバックを得ての調整である。と同時に、時間的拘束の面で少し余裕ができる分、2 期生が立ち上げたソーシャルビジネスの種をきちんとモニタリングしていきたいと考えている。5 人の研修生の間でも、少なくともハッカソンで優勝したアイデアである、フルーチーアップの製作・販売事業は、2 期生の成果という形で実現化したいということで合意しており、そのサポートをまずは継続的にしていく。具体的には、3 月に事業化をめざしたクラウドファンディングを行う予定である。プロモーション用の映像もすでに出来上がっており、現在は実施に向けて最終調整中である。フォローアップに関しては、現在のところ、毎週のように研修生たちが EDAYA の事務所に来てくれており、3 期生のメンターもかってでてくれているため、フォローアップの心配はあまりしていない。

## 3. その他(エピソード・感想・写真など)

### (1) 活動中のエピソード・感想など

皆恥ずかしがり屋で、人前で話すことすらできなかったのが、この半年を経て、自分に自信を持てるようになり、自然と人が周りにあつまってくるような人に成長したのは、彼らの未来をきっと変えてくれると思っている。ハッカソンの際には、これまでひとりで取り組んできたプロジェクトを他の同世代の若者の前でピッチし、共感者を募り、今度はチームでさらにプロジェクトを前進させる、ということに取り組んだ。私としては、どうなることやらと、ハラハラしてみていたのだが、どのグループも決裂することなく、お互いの強みを生かして、グループ発表に挑戦していたのが、印象的だった。また、5 つの違う州出身の 5 人が半年の共同生活を経て、一生ものの友情を育んでくれたことは、何よりも嬉しかった。新しい概念を、新しい学び方で学び、お互いの良いところも悪いところも、オープンな環境の中でシェアすることを繰り返しているうちに、自然と育まれていった友情だろう。

ここで、12月のハッカソンにゲストとして来てくださった、一般社団法人 re:terra lab. の渡邊さやか氏の感想を共有したい。非常に体系的かつ客観的に書いてくださっている。

-----以下、渡邊さやか氏のブログより抜粋-----

(前略)

バギオには、EDAYAの山下彩香ちゃんに声をかけてもらって、彼女たちチームが手がける Youth Hack Community Camp というプログラムの最終報告会で審査員/メンターとして参加するのを目的としてやってきた。Youth Hack Community Camp は、フィリピンの少数民族の若者たちを集めて、6ヶ月間で彼らの出身コミュニティに対していかに社会的インパクトを生み出す事業を生み出せるかを考えるというもの。

こう書いてしまうと、いわゆる事業創出のためのインキュベーション・プログラムなのだと思うかもしれないが、そうではないのである。このプログラムは、コミュニティの課題解決のための事業アイデアを生みだしブラッシュアップすること以上に、マニラから遠い場所で20時間以上も離れた場所に住む若者たちが、新しい概念や仲間と出会い、自分の殻を破って変わっていくものであった。

その最終報告の様子に、本当に心を打たれ、彼ら彼女たちとの出会いに感謝し、このプログラムをリードしたEDAYAチームに心から拍手を送りたいなと思ったのだ。

このプログラムの価値を理解するには、フィリピンの少数民族の若者たちを取り巻く環境を簡単にでも理解する必要がある。フィリピンは、現在も約6%の経済成長を続ける国で一人当たりGDPは2,947米ドル(IMF、2016年)。失業率は約6%で、日本も含め海外に出稼ぎにでる人も少なくない。また多民族国家で、言語はわかっているだけでも80言語以上あるとされている。出生率2.94人(世銀、2015年)でASEANの中で最も高い出生率を今も維持し、人口増加を続けている国で、大家族で家族やコミュニティの絆が強いと言われる。

そんなフィリピンにおいて、異なる民族の若者同士が交流を持つことはとても少なく、また各コミュニティ(村)において絆が強いため、逆にそれが社会規範的な暗黙のプレッシャーを生んでいたりもする。(実体験から、社会規範的な暗黙プレッシャーは日本の田舎もとても強いが)このような状況において、異なる5つの村から異なる民族の若者が集まるという状況は、本当に稀なことで、それだけでこのプログラムが挑戦しようとしていることの大きさが伝わるのではないだろうか。

このプログラムがどのように始まり、6ヶ月間どんなことがあって最終報告会を迎えたのか。私は最終審査にしか参加しなかったのだが、EDAYAチームから聞いた内容を基にここに記し

ておこうと思う。

### ●参加者募集

そもそも、”社会的インパクトを生み出す事業（社会企業）”という概念のない村において、どのようにプログラムを伝え、参加者を募ったのか。EDAYA チームによれば、彼らが竹調査で培った村長を始めとする人的ネットワークにコンタクトをして、それぞれの村を訪れプログラムのコンセプトについて説明して回ったのだと言う。バギオから近いところで5時間、遠いところで17時間以上もかかる村をそれぞれ訪れて、説明をして伝えたのだと。結果として、各村から約10人ずつ、50人に及ぶ若者たちから参加希望があり、全ての人たちと面接をして、各村から1人ずつの若者を選んだのだと言う。

### ●6ヶ月間のプログラム

そうして選ばれた5人の若者のバックグラウンドは様々で、もちろん家族や村の状況なども異なる。共通するのは、大学を出たけどその後なかなか仕事がないことや、家族や村からの社会的プレッシャーを何かしら感じていると言うこと、誰一人として社会企業（Social Enterprise）と言うことを聞いたこともなかったと言うことだろうか。

最初、みんな自己紹介も出来なかったのだと言う。名前と出身の村以外に何を自分のこととして話をしたら良いかわからない。それぞれの村から出てきて、初めて出会う同世代の異なる民族の仲間たちと、寝食を共にしながら、彼らの6ヶ月が始まる。自分自身や家族について語り合い、社会企業という新しい概念に触れ、デザイン思考や財務、ITなどを学ぶのだ。

参加した若者に、「なんでプログラムに参加したの？参加して何が一番大きかった？」と聞くと、「コミュニティのために何かしたいと思っていたけど、どうしたらいいかわからなかった」「ビジネスは悪いものだと思っていたけど、そうではないビジネスの創り方もあるのだと学んだ」という声が返ってきた。みんな新しい概念でわからなくて不安ではあった中でも、漠然とした期待感を持ちながら、このプログラムに飛び込んできたのだ。

6ヶ月のプログラムの中で、彼らは学ぶだけでなく、マニラに行って実際に社会企業に会ったり、1ヶ月間自分のコミュニティに戻ってフィールド調査を行ったりしてきている。このフィールド調査に行く中でも、彼らの人生や社会的な背景が垣間見えるエピソードが沢山詰まっている。

#### （参加者エピソード① マリネル）

彼女は、自分の村に戻ってフィールド調査を行うことを最初は拒否したのだと言う。彼女が、

家族が住む村で調査をしたくないと主張した背景には、両親との関係性が理由として存在していた。「両親は自分が何をしても褒めたりしないし、認めていない」と彼女は思っ育ってきたのだ。EDAYA チームに説得されて、彼女は自分の村に戻る。そこで初めて、彼女は両親に向き合い、これまで自分が感じてきたことや自分がやりたいことについて話をしたのだと言う。結果として、「両親は自分の一番のサポーターになってくれた」と彼女は教えてくれた。

#### (参加者エピソード② ノビー)

参加する前から「EDAYA も社会企業もよくわからないから、家族が心配した。そんなところに参加するのではなくて、村にいて農作業を手伝い、仕事に就いてほしいと言われた」と語った。そんな彼女がフィールド調査のために1ヶ月コミュニティに戻った時に、おばあちゃんの体調が悪く、彼女はフィールド調査に時間を使うのではなく、農作業を手伝うことで家族に貢献することを求められたのだと言う。結果として、彼女は1ヶ月のフィールド調査を終えた後、バギオに戻ってこなかった。家族が、彼女がプログラムに戻ることを許さなかったのである。彼女は、プログラムを継続できないことをEDAYA チームや仲間に来て伝えるために、1週間以上遅れてバギオに戻ってくる。そう断るために。バギオに戻った彼女は、EDAYA チーム以上に共にプログラムに参加している仲間と対話する中で、プログラム継続を決意し直す。先に紹介したマリネルが、「あなたが家族を大切に思っているのと同じように、家族もあなたを大切に思っている。だから、家族はあなたの決断を絶対に応援してくれる。」とノビーに言ってくれたことが大きかったのだと言う。

こうして参加した5人は、事業アイデア以上に自分の殻を破りながら、異なる民族の仲間との絆を育みながら6ヶ月を過ごしたのである。

#### ●最終報告会

5人の若者たちは全員、それぞれ2分の英語でのプレゼンテーションを堂々としてくれた。自分はどこから来て、なぜこの新しい事業アイデアを考えたのか、その事業を通じて自分のコミュニティがどう変わるのか。堂々と立って、審査委員の目を見て、しっかりとプレゼンをしてくれた。プラスチック容器による環境問題に対応するために、葉を使った容器を開発しようとする事業。自分のコミュニティにあるコーヒーをブランド化することに加えて、農閑散期に別の作物を加工して収入向上と雇用創出を行おうとする事業。コミュニティで取れる農作物を化粧品として加工して付加価値をつけようとする事業。若者が学び集まれるセンターを作ろうとする事業。活用していなかった農作物の加工をして、コミュニティの農家の所得向上と家にいる女性たちの雇用創出をしようとする事業。全て、プロトタイプとしての製品を作って見せて、食べさせたり、試したりできる状態でプレゼンテーションをしてくれた事業案である。

なかには想いが溢れて、事業アイデアを考えた理由を泣きながら語ってくれた子もいる。彼女は両親が小さい頃にいなくなってしまい、自分が長女として幼い兄妹の面倒を見てきた経験があり、自分がしてきた想いを他の若者に経験して欲しくないと訴えた。

ITの学校を出て、ITを通じた事業創出を考えていた子は、最終的には全くITとは異なる事業案を発表した。彼にとって、ITから離れて、コミュニティの課題に真摯に向き合ったことが一番の大変だったことであり、自分が変化したタイミングだったと教えてくれた。この彼が、今回の優勝者だ。プロトタイプの商品は食品だったのだが、商品も美味しくパッケージも完成度が高く、また初期投資も少なくて始められるモデルで実現性も高かった。

こうした半年間を駆け抜けた5人の若者たちの姿に、強く感動したのは、事業案の素晴らしさではなく、彼らが自分自身に向き合った中で得られた「自分」という存在感であり、彼らが育んできた友情がとても大きい。

(以下省略)

-----以上、渡邊さやか氏のブログより抜粋-----

## (2) 活動の写真



Sir Saboy のレクチャー





工房でのハンズオン授業の様子 3 枚



Youth Hack Community Camp を終えての一コマ（研修生とゲスト、講師たちと）



あるグループの発表練習

★地元テレビのニュースで放映された Youth Hack Community Camp の様子

<https://www.facebook.com/edayacordilleraph/videos/2002684769973186/>